

今を生きる



私は父との「男ふたり暮らし」です。その生活は、正直なところ少しドライで、互いの年齢もあつてか、なんとなくぎこちない雰囲気がありました。

高1の冬、父から珍しい時間に着信がありました。勤務先の病院で受けた検査結果が悪く、入院して手術をすることになったという連絡でした。私はそれを聞いた瞬間、ドライだったはずの父との関係がぐっと湿った感じがしました。同時に、冷静にふるまいたいののに、思考と感情の整理がまったく追いつかずぐちゃぐちゃな状態になってしまいました。

私は、持病があるのに奔放な食生活を続ける父のことが気になりつつも、「言えばどうせ喧嘩になる」とか「別に自分には関係ない」などと適当な理由付けをして面倒を避け、不都合から目をそらしていました。異変に気づきながら、父と向き合う

高稜高等学校

三年

中村

俊哉

なかむら

としや

ことから逃げていました。そしてそれを後悔し、自分を責めました。喧嘩になつてでも言っておけばよかった、父が病魔に侵されたのは自分のせいだと勝手な自責の念を自分の中で抑えきれなくなっていました。多分私は、このときまで父のことをそんなに好きではなかったと思います。二人きりで暮らす中、父を好きかどうかなどあえて考えないようにしていたようにも思えます。しかしこのとき初めて、父の存在、そしてその「死」を意識し、それを恐れている自分を認めました。幸い、早期に対処できたおかげで、父は快復し、私たちは「男ふたり暮らし」を再開しました。その生活は、以前のドライなものとは少し違って感じました。

高2の夏、父がまた別の大病を発症しました。父はその日の朝も体調不良を押して出勤しましたが、あまりの不調に勤務先で検査を受けてそのまま入院したのです。もし、そこで受診していなければその日のうちに亡くなっていたらとうと聞き、「運

命」とか「紙一重」とか、いままで言葉としてしか知らなかったいくつかの表現が急に私の中で生々しく立ち上がり、自分にとって父が掛けがえのない存在であることを改めて痛感しました。「手術がうまくいっても後遺症がのこるかもしれない」と説明されましたが、そのとき私は、どんな父でも父とともにいたいと、自分でも意外なくらい素直に思いました。結局、術後の後遺症はあったものの、父は前向きなりハビリを続け、今ではほぼ回復しました。そして、現在、父と私は健康的に今までで一番いい「男ふたり暮らし」を送っています。

もしも人生をタイムスリップできるとしたら、「過去」か「未来」か：私がそう問われたら、どちらでもなく、ただ「今を生きたい」と答えます。後悔していることも沢山あるし、失敗も沢山してきました。もっと早く父と向き合っていれば、父の病は避けられたかもしれないとも思います。しかし、過去に戻ってやり直したいとは思いません。また、未来の世界や自分をのぞいてみたいという好奇心もあります。しかし、今の自分を飛び越えて脈絡のない人生を生きたいとは思いません。私は、過去の自分のうえに今の自分があり、そして、今の生き方の先に未来が開かれていると信じて今を生きていきたいのです。私たち

は無限の可能性を秘めていて、今の自分次第で何にでもなれるはず。そう信じて、今を積み重ねて未来に向かいたいのです。

―僕の前に道はない　僕の後ろに道はできる―（高村光太郎『道程』）

「人生、いつ何が起こるかわからない」と誰もが言うし、私も父もそれを経験し「命」について考えてきました。それでも、高校生の私にとって「人生」とは、やはりとてつもなく遠く長いもののように思えます。そして私は、とりあえず今を一步一步つあゆんで生きていくことしかできません。今はいましかありません。一刹那の今を「諸行無常」と虚しく憐むのではなく、どうせなら私はただひたすら自分の今を大切に生きて次の今に繋げていきたいと思うのです。いま、私は父が好きだとはつきり言えます。いまだからこそ言えます。いましか生きられない今を大切に前向きに生きようと思わせてくれたのも父です。

十八歳。常に悩み葛藤する毎日ですが、最愛の父がいて、親しい友があり、尊敬する師に導かれ、生まれ育ったこの若松でたくさんの人に支えられて、私は今も前を向いて、今を生きています。

ふるさと若松の可能性



皆さんは10年後のこのまちに

ついて考えたことはありますか、と聞かれてもすぐには思いつかないかもしれません。私が毎日登下校中に見ている景色やいつも遊んでいた公園、友達と

一緒に勉学に励んだ学校など若松について思い浮かべるものはたくさんありますが、これらが10年後どういう風になっていくのか、想像もつきません。そして、私自身もこれまで考えたこともありませんでした。ですが、若松高校で2年間取り組んだ探究型学習の「若松学」をきっかけに、若松のまちについて考えるようになりました。

まず、このまちの風景を守っていくためには、人口減少とこの問題と対峙しなければなりません。人が集まらなければまちの活気がなくなってしまう、美しい景観は維持できなくなります。そうなるとさらに人が減り、若松から移住する人

若松高等学校

三年

榎園

心晴

えのきその

こはる

も出てしまうのではないのでしょうか。そこで、観光客を増やすことで滞在する人の数を増やし、まちの活気を取り戻すことが人口減少の抑制につながると考えます。

「若松学」では観光について、若戸大橋とレトロな街並みが魅力の南海岸と、豊かな海産物や美しい海岸が広がる北海岸、ブランド農産物が多い西部地区を一つの観光地とする「観光の回遊性」を提案しました。

「観光の回遊性」を実現するためには、交通の利便性を向上させる必要があります。駅に近い南海岸から北海岸、西部地区までのアクセスが良くなければなりません。また、南海岸は若戸大橋のライトアップで夜景が素晴らしいのですが、近くに立ち寄るところが少なく、寂しい印象があります。すぐ近くにある商店街と南海岸が連携することで、立ち寄ることのできる飲食店が増えれば、少しずつ観光客が増えていくと考えます。次に、北海岸と西部地区ですが、「若松学」では、

北海岸にSNS等で写真映えするモニュメントの設置や飲食店の誘致を、西部地区には、特産物を集約して販売する場所を整備することを提案しています。「若松学」では、市内の大型商業施設や様々な観光地との結びつきを強くして、回遊性を高めることも提案しています。これらの提案が実現すれば、若松だけでなく北九州市全体が盛り上がり、観光地としての魅力が高まるのではないのでしょうか。

さらに、私たち高校生が取り組むことができることとして、若松のすばらしい情報についてSNSに投稿することがあげられます。また、若松の特産物を使ったグルメを開発したり、海に落ちている貝殻などを使ってアクセサリを作ったりして発信することができると思います。これらの案を地元の学校に募ったり、区役所のホームページで募集したりすることで、子供から大人までが参加することができ、若松についてさらに考える機会にもなります。また、綺麗な自然や街並みを守っていくために、若松の玄関にもなる若松駅周辺や人が賑わう海水浴場、イベントの時などにゴミ拾いや掃除をするボランティアに参加し、少しでもまちを綺麗に保つ事で、このまちに来る人達に良い印象を与えられ、足を運びやすくな

るのではないかと思います。

私は生まれてきて今までずっと若松に住んでいます。今までこのまちでたくさんさんの経験をし、たくさんさんの思い出がありました。すでに変わってしまった風景や街並みなどがありますが、少しでもこれらの思い出が記憶だけに終わらぬように、今できることを考え実行したいと思います。未来の若松がすべての世代の笑顔あふれる、住みやすいふるさとになる事を願っています。



企業と若松の 自然の繋がり

私は課題研究という授業で地域と企業の探究というコースで学び、様々な若松の魅力を探しました。その時、若松について、改めて調べてみると知らないことが多くありました。特に興味深いと思ったことは自然との繋がりを大事にしている企業が多くあるという事です。そこで若松高等学校の「若松学」企業研究班の方々が学校に寄贈してくださった「若松区企業探訪」の中で特に気になった二つの企業と若松の自然の繋がりについて私なりに考えてみました。

一つ目は「ジェイ・リライツ」です。この企業は、回収した使用済み製品のリサイクルを行っている企業です。使用済みの蛍光管を可能な限り元の原料に戻したり、電池類や血圧計や体温計等の水銀を使った製品をリサイクルしたりすることです。水銀の使用は世界的に問題視されていますが、最善の方法を培った技術で安全にリサイクルをし高純度の金属水銀へと再利用

できるようにしました。ここで再生産された水銀は大学や研究機関で使われています。私達の身近にも使われている水銀は皆さんも知っている通り危険なものです。ただ再利用するだけでも難しいなか自然が多い若松区で環境への配慮をしながら害を出さずにリサイクルすることがすごいと感じました。企業理念にもある「私たちの地球をきれいなままで次世代へ引き継ぎたい」という思いがこの若松区から全世界へ広がっているのではないかと思いい感動しました。

二つ目は「久屋産業」です。この企業は、医療系廃棄物をはじめとする特別管理廃棄物などのゴミや、廃タイヤ、産業廃棄物などを収集運搬から有害物質ダイオキシンが発生しない高温での焼却処理まで行っています。さらに防衛省の潜水艦や護衛艦などの船舶解体も多く行っています。特に船舶の解体や鉄やゴムなどが一体化している複雑なものや、手作業では分離できないものなども独自の破砕機で、有害なガスを使うことなく碎

若松商業高等学校

二年

御木 みき

彩紗菜 あさな

いています。このように有害物質を発生させず、有害なガスを使用せず自然に優しいリサイクル方法を行って興味深く思いました。昨年は地域におけるまちの美化意識の高揚や清掃活動など、環境事業に積極的に協力をし、美しいまちづくりの成果をあげている団体として北九州市賞などを受賞しています。また、ゴミを自社で焼却し「ゴミゼロ」にも挑戦しており、これからの若松の自然環境やSDGsに対する考え方を変えていく企業だと思いました。

二つの企業を通して若松の自然と企業の繋がりについて調べ、考えましたが、この二つの企業の共通点は「有害物を出さないように最善を尽くすこと」「もつと改善出来るところはなにか模索すること」だと思えます。企業理念にもこの二つの共通点と似ていることが書かれておりこの若松から自然環境について考え、最善を尽くしていることが分かります。そしてさまざまな技術を研究して改善できるところを探し、挑戦を続けている事が素晴らしいと感じました。

そして思ったことは、周りのクラスメイトや中学生は今の若松についてあまり知らないのではと思いました。私自身調べながら知らない事も多くあり、水銀や船舶解体のリサイクルなどについてもこの意見交換会での発表をきっかけで知る事ができ

ました。今は学校から配布されたパソコンやタブレットを使う授業が多くなってきているので、調べ学習などがしやすくなっています。今後若松の企業についても調べる機会が増えれば良いなと思いました。進路を決める三年生は企業について調べる機会が多いですが、中学生はその機会があまり無いと思うので、授業の一環として企業や仕事について学ぶ機会を設けたらどうでしょうか。そこで私が考えたのは企業と学校が共同でアイデアを出し合い商品を作ったり、イベントを企画してみることです。それが商品やイベント、地域についていろいろと調べるきっかけになるのではないのでしょうか。共同商品のアイデア作りは私がい実際に課題研究という授業で行っているものですが様々な企業や若松のことについて調べるきっかけにもなり、とてもいいものです。中学生の皆さんはあまりこのような機会は無いのかなと思います。このような活動は進路を決める一つの手掛かりになりますよ。

紹介した二つの企業以外にも若松区内にはほかにも自然環境を考えた企業が数多くあります。この発表で興味を持っていただけだと思います。